

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380721

研究課題名(和文) 近代のコンサートの芸術性と劇場性に関する社会学的研究

研究課題名(英文) Sociological Research on the Aesthetics and the Theatricality of Concerts in Modern Europe

研究代表者

宮本 直美 (Miyamoto, Naomi)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：40401161

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は近代ヨーロッパにおけるコンサート制度がどのように成立したかを探求するものである。器楽コンサートの独立には長い間オペラの助けが必要とされており、交響曲が市場において自立する際に「クラシック」という概念が音楽界に定着した。19世紀の音楽界では器楽の美学と市場原理が調停されてゆく経緯を確認できるが、そこには器楽と劇場との密接な関係、知識人の批評活動、そしてポピュラーなオペラ抜粋の楽譜出版などの事情が絡んでいた。本課題ではそうした音楽界の構造を、ヨーロッパの主要都市を対象としながら解明した。

研究成果の概要(英文)：This research explores the process of concerts in modern Europe. Before symphony concerts adopted the form they have today, concerts generally needed the help of vocal programmes in the form of excerpts from popular operas for commercial purposes, and the concept of the “classical” was introduced into the world of music when instrumental music began to become an independent art form. We can realise the reconciliation between the aesthetics of instrumental music and the market principle; namely, the processes involving the close relationship between instrumental music and theatre (opera houses), intellectual criticism, and the publication of popular operatic music and songs. This project clarifies the mechanisms in the world of European music.

研究分野：社会学

キーワード：コンサート 劇場性 正典 音楽社会学 文化社会学

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の当初の背景としては、筆者が継続的に行ってきた 19 世紀ドイツにおける音楽の社会的意味の考察がある。本課題の前に筆者は、近代ドイツにおいて宗教的オーラを獲得したこと、またそこに聴取様式が結びついたことを明らかにしたが、その考察の中で鍵となる概念として浮上したのが「劇場性」の問題である。音楽界の近代化に関してオペラと劇場という問題を加えて扱う必要性が新たな課題として生じた。

(2) 先行研究の背景としては、19 世紀にシンフォニー・コンサートが成立した事例はよく知られているものの、器楽とオペラを共に扱った研究事例は断片的にしか存在しないという点が挙げられる。両者は常に共存していたにも関わらず、それらがどのような関係にあったのかはほとんど知られていなかった。両領域を同時に考察することは、音楽社会学の一実践であるだけでなく、従来の音楽史理解にも変更を迫る意味を持っている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近代ヨーロッパにおいてクラシック音楽のコンサート・システムが劇場という場と密接に関わりあいながら成立したそのメカニズムを分析することにある。より具体的には、当時の美学的議論と市場との矛盾する関係、聴衆の階層意識と聴取態度、音楽家の労働事情や社会的地位などを社会的に分析することが目的であり、それにより、一都市に限定した個別事例ではなく、ヨーロッパの主要都市に広範に見られた音楽現象を解明することができる。

近代的コンサート成立について、従来の研究ではライプツィヒ・ゲヴァントハウス・コンサートが象徴的な位置を占め、絶対音楽の理念とともに、ドイツの音楽美学と文化ナショナリズムの文脈で考察されることが少なくなかった。しかしながら、交響曲を中心に据えるコンサート・システムはドイツのみで形成されたわけではない。本研究では、ロンドン、パリ、ウィーンといった当時の音楽文化の主要都市を横断的に調査・考察することにより、近代的コンサート整備という現象が全欧的な現象であったことを明らかにする。

さらに、従来のコンサートの歴史は国内外ともに、器楽コンサートのみに関心を合わせて研究されてきたが、そのシステムが整備される中で劇場的なもの、とりわけオペラの「ポピュラーな人気」の存在感があったことを重視したものはほとんどなかった。現在のクラシック音楽界を代表するジャンルである交響曲とオペラが、19 世紀においては全く異なる美学と市場に置かれていたことを考察することにより、本研究は改めて現在の「クラシック音楽」と「ポピュラー音楽」の社会通念上の分離の根底を問いただすものでもある。

3. 研究の方法

先行研究より、19 世紀前半に成立した主要なコンサート組織、オーケストラ団体は明らかになっているが、本研究ではまずそれらの団体が定期的開催していたコンサートのプログラムを調査した。その際、特に重要な資料となったのは、プレイビルあるいはコンサートビルと呼ばれる現在のポスターやチラシに相当するものである。こうした資料はイギリスの大英図書館である程度見ることができたが、様々なケーススタディの先行研究からも情報を得た。音楽雑誌における批評についてはこれまでも調査してきたが、ポスターの類がプログラムを考察する上で重要なのは、文字の大きさなどから、聴衆に何をアピールしていたかが分かるためである。

その一方、そうしたコンサートがどのように受け入れられていたかを考察するために、音楽雑誌の批評欄も参照した。それにより、ポスターにおける商業的なアピールポイントと、インテリ批評家の注目点とのずれが確認できた。さらに、特にイギリスの雑誌では、コンサート団体の人事や報酬に関わる騒動なども記事になっており、当時の組織内の状況を部分的にはあるが調査することができた。

音楽雑誌調査におけるまた別の重要な情報は、広告にある。当時の音楽雑誌の広告は楽譜出版広告が大部分を占めており、音楽出版社の活動範囲、出版楽譜の特徴なども、コンサートのプログラムと関連している。出版社もまた国境を越えて事業を展開しており、コンサートを全欧的な枠組みで捉える重要性はここからも分かる。

また、プログラム調査からは、出演者情報を得ることができたが、複数のプレイビルを照合すると、同じ演奏者がどのようなコンサートを掛け持ちしていたかが分かる。そして、音楽家たちがどのように国境を越えて活動していたかも確認できた。

4. 研究成果

(1) ヨーロッパの主要都市のコンサート・プログラムを調査した結果明らかになったのは、器楽コンサートが 19 世紀前半には「自立」しえなかったということである。現在から見て、器楽コンサート、あるいはシンフォニー・コンサートと見なされていたシリーズでさえ、プログラムからすれば、その半数以上はオペラを中心とする声楽曲によって占められていたことが明らかとなる。その構成はしばしば器楽 - 声楽 - 器楽 - 声楽という形で交互に配置されていた。それによってプログラムが退屈にならないようにするためである。そしてコンサートビルからも、歌手名が聴衆にとって重要な意味を持っていたことが分かる。器楽の自立の困難という事態から窺えるのは、歌のない音楽を聴くという行為が当時はいかに困難であったかということである。しかも器楽を単独で聴くという

習慣は、劇場の領域から出てきた。これは特にパリの音楽界に関する先行研究から示唆を受けているが、J. ジョンソンやB. ウォルトンも説明しているように、19世紀前半にヨーロッパ中を席卷したロッシーニのオペラが「器乐的」な音楽を聴く習慣を育成したという側面がある。また、劇場においてオペラの合間に器楽コンサートが催されており、器楽はオペラの周辺からその助けを得て徐々に自立してきた過程が明らかとなった。器楽の独立については、従来はドイツ語圏における純粋音楽(=絶対音楽)の理念から説明されてきた部分が多いが、コンサートの現場にそうした理念が浸透するには様々な条件と段階が必要であった。

(2)本研究では、現在にまで名を残すようなオーケストラ団体の定期コンサートだけではなく、様々な断片的資料から単独で行われたコンサートの調査も行った。それらはコンサートとして圧倒的な数に上る「ベネフィット・コンサート」と呼ばれるもので、入場料収益を出演者の収入とするための催しであった。従来これは「慈善演奏会」と訳されることが多かったが、実態は慈善事業の場合もあるものの、器楽奏者の収入を確保するためのものである。こうしたコンサートではより多くの聴衆を集めるために、プログラムは多様である必要があった。他方、人気を集めていたのはヴィルトゥオーゾ・コンサートで、全欧的なスターだったリストは、オーケストラや他の奏者を必要としない単独の「リサイタル」を始めた。これは現在でも使用されるように、独奏のコンサートである。これはコスト削減という実際的な事情によることも多いが、結果的にはこの商業的コンサートからプログラム統一が実践された点は重要である。ピアノ曲のみで構成するというコンサートは19世紀前半には珍しく、批判も多かった。

商業的なコンサートが増える中、交響曲を支持する知識人層からは、難解で一般受けしない器楽を理解するために何度も聴くべきだという意見が度々出された。特にA.B. マルクスの理論は外国にも影響を与え、人気のない交響曲を聴くべきだという主張がパリやロンドンでも定着するようになった。このような意識を持つ人々が組織したコンサートでは、交響曲を何度も聴くようなコンサート・シリーズが催される。まさにこの時期に、モーツァルトやベートーヴェンという故人作曲家は「クラシック」と呼ばれるようになった。この概念が意味するのは、何度も触れて理解することにより、人間性を陶冶するという教養主義である。このクラシックという観念は、プログラム上では同じ曲を何度も演奏するという形態につながる。現在のように、過去の作品を繰り返し演奏するという方式は19世紀半ば頃から徐々に始まったのである。

さらにその「クラシック」に分類された音楽をもっと一般の人々に提供しようという「ポピュラー・コンサート」も企画されたが、ここでは「クラシック」音楽が「ポピュラー」の名称で扱われていた点が注目に値する。まだこの時点では「クラシック音楽」と「ポピュラー音楽」という認識はなかったのである。

(3)また、本研究では楽譜出版事業にも注目をした。各都市の音楽出版社の重大な収入源はオペラ関連の楽譜であった。オペラのアリアの声乐譜、そのピアノ編曲版、室内楽版など、オペラの人気曲をブルジョワ市民の家庭で楽しめるような楽譜が売り上げを誇った。ここにもオペラの勢力は圧倒的である。そのオペラの利権はヨーロッパ中に通用するものであり、人気オペラの自国での著作権を得ることは出版社にとっては魅力的な事業であった。しかし同時に売れないジャンルである交響曲などの器楽曲の楽譜も、こうした出版社ネットワークによって国境を越えていた。19世紀に各国で開花した音楽雑誌もまた、これらの音楽出版社によるもので、その記事の中でまじめな器楽が推奨される一方で、その雑誌自体を経済的に支えていたのはオペラのような劇場音楽であったという構造も指摘した。

以上の研究成果を『コンサートという文化装置 交響曲とオペラのヨーロッパ近代』という単行本にまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

宮本 直美「嗜好の対象としての歌声 - クラシック歌唱からポピュラー歌唱へ」、『嗜好品文化研究』第2号、26-37、2017年、査読なし。

宮本 直美「女声の低音と舞台上のジェンダー - オペラにおけるズボン役との比較から見た宝塚歌劇の男役」、『ポピュラー音楽研究』第18号、33-47、2015年、査読あり。

[学会発表](計6件)

宮本 直美「共に歌うことの社会学 - 集合的記憶と集合的感情」、シンポジウム「歌と文化的記憶 - 表現と社会」、神戸大学(兵庫県・神戸市)、2016/11/19。

MIYAMOTO, Naomi "Theatrical Gender Image and 'Takarazuka Revue': The first 2.5D musical company" (Oral Presentation), 9th Midterm Conference of the ESA RN-Sociology of the Arts (ESA-Arts 2016) in Porto, Portugal, 2016/09/10.

MIYAMOTO, Naomi "Classical Music and

Popular Music: the Japanese Government's Cultural Policy" (Oral Presentation), 12th Conference of the European Sociological Association in Prague, Czech Republic, 2015/08/27.

宮本 直美「声域とジェンダー - - 宝塚歌劇における男役の声の低音化 - - 』第 87 回日本社会学会大会、神戸大学 (兵庫県・神戸市) 2014/11/22.

MIYAMOTO, Naomi "Musicology in Post-War Japan: German Influence and Social Context" (Oral Presentation), XVIII ISA World Congress of Sociology, Yokohama, Japan, パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市), 2014/07/17.

MIYAMOTO, Naomi "Differentiating Gender Roles Onstage: An Analysis of the Takarazuka Performance" (Oral Presentation), XVIII ISA World Congress of Sociology, Yokohama, Japan, パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市), 2014/07/15.

〔図書〕(計 2 件)

宮本 直美『コンサートという文化装置 - - 交響曲とオペラのヨーロッパ近代 - - 』、岩波書店、2016 年、253。

MIYAMOTO, Naomi "The Takarazuka Revue: Its Star System and Fans' Support", *Made in Japan. Studies in Popular Music* (Routledge), 254 (23-36), 2014.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
出願年月日 :
国内外の別 :

取得状況 (計 件)

名称 :
発明者 :
権利者 :
種類 :
番号 :
取得年月日 :
国内外の別 :

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

宮本 直美 (MIYAMOTO, Naomi)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号 : 40401161

(2)研究分担者

()

研究者番号 :

(3)連携研究者

()

研究者番号 :

(4)研究協力者

()